

【踏査報告】対馬の縄文時代遺跡の報告

—対馬北部の新遺跡・黒曜石に魅せられて—

長 崎 章
長 崎 菜々子

2023年 3 月

『西海考古』第13号 抜刷

【踏査報告】 対馬の縄文時代遺跡の報告

—対馬北部の新遺跡・黒曜石に魅せられて—

長崎 章 長崎菜々子

はじめに

対馬は九州北部に位置し、南北72km 東西18km の離島で、東西を対馬暖流が流れる。上対馬町の比田勝港から福岡市の博多港まで147km、上対馬町鰐浦の鬼ガ崎から韓国の釜山までは49.5km と九州本土より朝鮮半島に近い「国境の島」である。天気の良いと釜山市街が肉眼で確認できる。

対馬は山林が全体の89パーセントを占め（図1）、その山々の多くは海岸線まで迫っている。南北に連なる分水嶺は東側に片寄り、対馬の東側は急斜面となっている。このため東海岸には洪積地が形成されていない。上島西海岸にある佐護川、仁田川、三根川、下島西海岸にある佐須川の流域で僅かに平野が見られる。

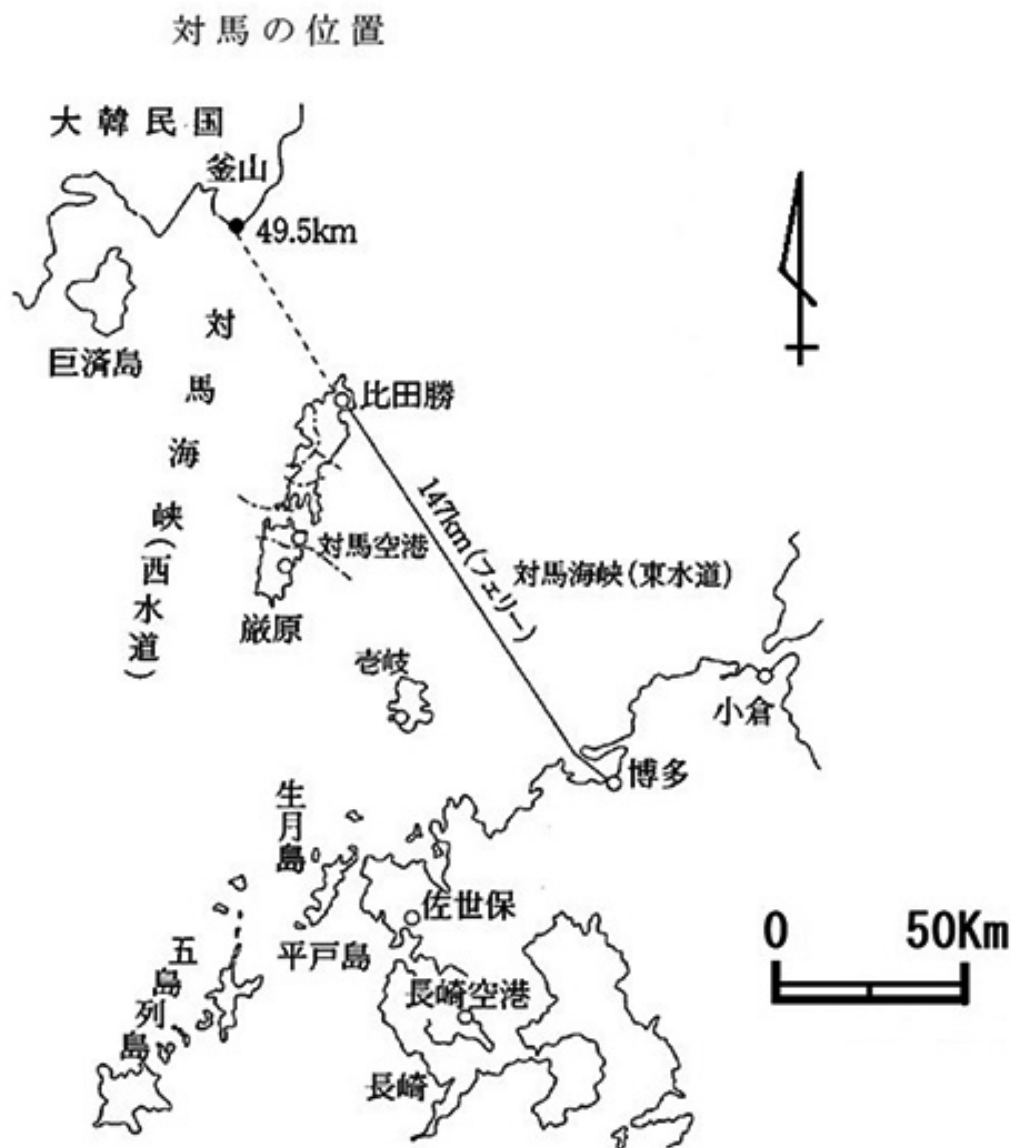


図1 対馬の位置（国土地理院地図に加筆） S = 1 / 2,000,000

1. 対馬の考古学的調査

対馬は国境の島であると同時に戦前は要塞の島であり島内の陸上交通は整備されておらず、近年まで全島的な学術調査は困難な状況であった。初めての考古資料が見られるのは対馬藩の学者平山東山の『津島紀事』(1809年)と『明治10年神社調』(1877)の銅矛をはじめとする記事である。その後、大正4年(1915)鳥居龍蔵が朝鮮からの帰途、船で上県町佐須奈に上陸し地元の浦田政雄の案内で白岳(上県町佐護)や千人塚・万人塚・大將軍山古墳などを調査し、志多留貝塚を発見している。

大正10年(1921)佐護クビルから銅矛と銅鍔が発見され、東京帝国博物館の後藤守一は大正11年(1922)現地を訪れ報告を行っている。昭和2年(1927)三根ガヤノキ遺跡の調査が行われ弥生文化と青銅器の関係と半島との関わりについて提起された。昭和23年(1948)東亜考古学会は対馬のほぼ全島にわたって考古学調査を行った。この調査には地元の若い研究者も参加している。昭和25・26年(1950・1951)には九学会連合対馬共同調査委員会の事業として日本考古学協会が調査を行い志多留貝塚・大將軍山古墳を駒井和愛・三木文雄が発掘し、杉原荘介が美津島町賀谷洞穴の調査を行っている。昭和30年代の後半になると永留久恵・阿比留嘉博を中心とする対馬郷土史研究会の手で分布調査や発掘調査が行われ、『対馬島誌』を刊行するに至った。昭和43・45年(1968・70)の二度にわたり実施された浅茅湾周辺の考古学調査は、九州大学考古学研究室、長崎大学医学部第二教室、対馬郷土史研究会の協力のもと長崎県教育委員会が主体となったもので、多大の成果を上げた。その後も別府大学や長崎大学による縄文時代の調査や長崎県および地元教育委員会の発掘調査が行われ、対馬の考古学的年代の推移は縄文時代、弥生時代、古墳時代ともに、北部九州と同じであること、この中に各時代朝鮮半島より舶載されたものを数多く含み、日本の年代をこれにより確かめられることなどが明らかにされた。

今までのところ対馬で旧石器文化は確認されていない。朝鮮半島南岸においても壱岐島においても旧石器時代の遺跡は確認されており、対馬においても近い将来確認される日が来ると思われる。

対馬における縄文時代遺跡の発見は大正4年(1915)、鳥居龍蔵が仁田湾入り口北側の志多留で遺物包含層を確認したのに始まる。越高遺跡では曾畑式土器・隆起文土器・隆起線文土器、遺構は朝鮮半島式の炉跡が見つかっている。仁田湾を挟んで対岸にある夫婦石遺跡では最下層の13層から曾畑式土器が出土しており、上層では櫛目文土器が出土している。曾畑式土器が櫛目文土器より先行するという層位結果から問題を提起している。特に本遺跡の神社周辺は良好な土層の堆積状況が見られることから、この部分の調査が韓国櫛目文土器と縄文土器との接点を見いだす重要な地点と考えられる。また、向ノサエ遺跡で表面採集された土器は貝殻による押引文であることから南九州系の土器と考えられている。西加藤遺跡は昭和49年(1974)に調査され、海底2^{メートル}の深さから口縁部が外反し胴が張り出した鈍い尖底深鉢になる田村式系統の土器が出土している。現在のところ対馬における一番古い土器である。貝塚は縄文後期と弥生前・中期の複合遺跡である上県町志多留貝塚、縄文中期の峰町佐賀貝塚などがある(長崎県教育委員会 1998)。対馬島内の周知の縄文遺跡は30を数えるが、平成になってから新規の遺跡登録はなく、著者が居住する対馬北部の縄文遺跡は上対馬町泉の泉遺跡だけであった。朝鮮半島に近い対馬北部にも遺跡があるはずと、娘と二人で海岸を中心に踏査を始め、平成28年(2016)上対馬町豊の海岸で土器、黒曜石製剥片、頁岩製石器を発見した(シレンナー遺跡)。平成30年(2018)上対馬町^{わにうら}鰐浦の海岸で黒曜石鏃、頁岩製石器、陶質土器等を発見(鬼ガ崎遺跡)し両遺跡とも遺跡登録された。娘は遺跡で見つかる黒曜石に興味を持ち、長崎県埋蔵文化財センターの指導を受け『対馬黒曜石の産地推定』を実施している。『鳥居龍蔵生誕150周年記念 全国高等学校歴史文化フォーラム2020 in 徳島』において口頭報告を行った。

2. 周知の縄文遺跡と新規発見の縄文遺跡

対馬の縄文時代の遺跡は西側に多いと言われていたが、地図上に記すと東西同じように分布していることがわかる(図2)。縄文遺跡空白地の上県町佐須奈から上対馬町西泊まで、上対馬町舟志湾周辺、上県町佐護から志多留まで、上県町^{うなつら}女連から峰町木坂和保までの踏査を続け、上島の18カ所(図3)で縄文時代の遺物を表面採集している。周知の遺跡6「コウブリヤ洞窟」から8「志多留貝塚」までに弥生時代以降の遺跡は数カ所あるが今回は記載しなかった。下島の20「クノエ遺跡(仮称)」は、厳原町小茂田在住の伊原雅樹氏から黒曜石らしきものを見つけたとの連絡があり、現地にて黒曜石と打製石斧を確認・採集した。

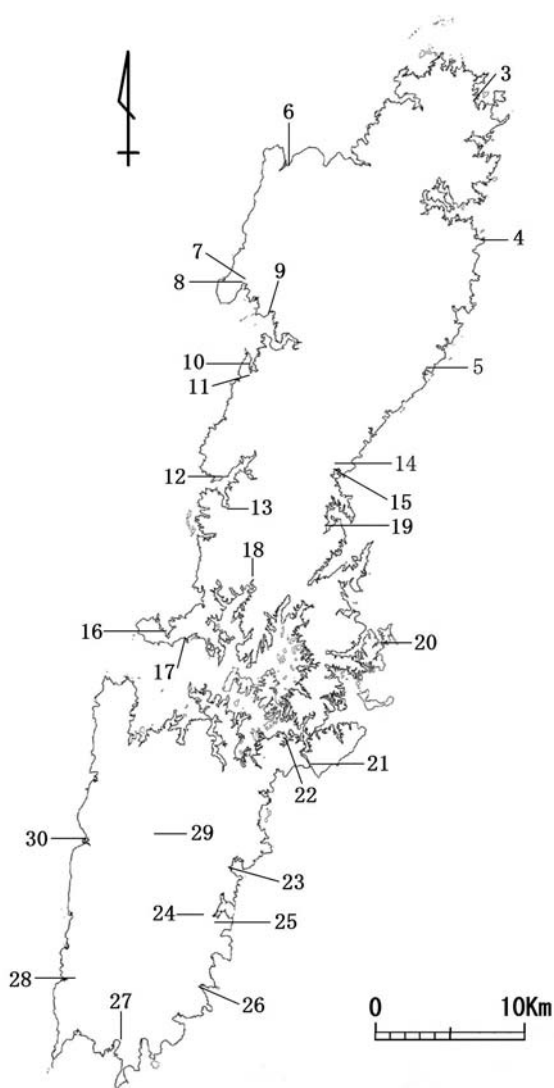


図2 周知の縄文遺跡地図 S = 1 / 500, 000

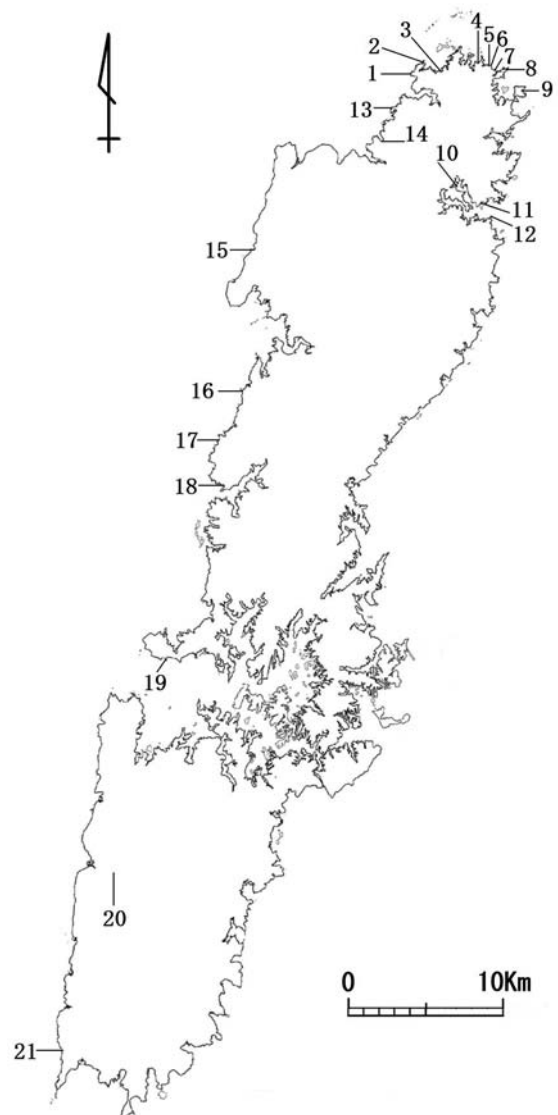


図3 新規発見の縄文遺跡地図 S = 1 / 500, 000
(国土地理院地図に加筆)